

ジュゼッペ・ロスとロス文庫

高田時雄

ロス文庫というのはイタリアの外交官ジュゼッペ・ロス (Giuseppe Ros) が、その四〇年に及ぶ中国滞在中、たゆまぬ努力によって築き上げた文庫であり、近代中国におけるヨーロッパ人の蒐書としては、質量ともに最大のものの一つである¹。しかしその実態と現存状況については不明な部分が多い。筆者は、ある機縁から十年來断続的にロス文庫の追跡を試みているが、残念なことに満足の行く結果はなお得られてはいない。小文は、その間に得られたわずかな知見のさらに一部である。博雅の士のご教示を得ることができれば幸いである。

まず順序としてロスの生涯を簡単に見ておこう²。ジュゼッペ・ロスは一八八三年八月二日、ナポリに生まれた。父方の祖先はスペイン系で、最初ナヴァラに、のちカタロニアに移ったとされる。その後、十八世紀後半に、家系中のある人物がナポリに移り住んだのが、ロス家の直接の祖先である。ナポリ東洋大学を卒業して³、一九〇八年三月、外務省の通訳官試験に合格、ついで上海に配属される⁴。一九一〇年、三等通訳官。おそらく上海赴任をきっかけにして結婚。相手はテレサ・プーマ (Teresa Puma) という女性で、その祖先もまたスペイン系、代々シチリアに住み、パレルモの近郊に男爵領をもっていた。一九〇九年に、長男ハーバート・スペンサーが誕生したのをはじめ、一九〇一年に長女マルチェラ、一九一二年にダンテとマルコという双子の兄弟を得た。長男に与えた甚だイタリア人らしからぬ名前は、ロスが当時傾倒していたイギリスの哲学者にちなんだものである。辛亥革命の前後を新任通訳として上海で過ごしたロスは、国民党の要人にして青幫のボスでもあった陳其美とも密接な交友関係をもっていたらしい⁵。ただそれが外交官としての仕事の枠内に収まるものであったか、あるいはそれ以上の何かがあったのかは分からない。一八一八年、ヨーロッパでの戦争が終結した直後、子供たちの教育を考慮し、また必ずしも円満ではなかった夫婦間の関係を解決するため、家族をヨーロッパに送り返すことを決心。翌年早々家族を連れてヨーロッパに向け出発、ローマでの家族の生活を確保したのち単身中国へ戻った。一九二一年から二四年にかけて、漢口に領事として滞在したが、ついで二四年三月に北平 (北京) に赴任。一九二

¹ ヨーロッパ人による蒐書は、宣教師や外交官など長く中国に滞在した人によるものが、やはり多い。トマス・ウェイド (Thomas Wade) の文庫はケンブリッジ大学に、ジェイムス・レグ (James Legge) の文庫はオックスフォード大学に今日帰している。ともに彼らが晩年、両大学に中国学の講席を占めた縁による。ロスと同じイタリア人では、ローマ大学教授を勤めたヴァッカ (Giovanni Vacca) の文庫がヴァチカン図書館に所蔵され、同じくローマ大学に教鞭を執ったノチェンティーニ (Lodovico Nocentini) の蒐集がローマ大学に入っている。やや変わったところではバックハウスのコレクションがオックスフォードにあり、その謎に満ちた数奇な生涯については、イギリスの史家トレヴァー・ローパーによる伝記に詳しい (*A Hidden Life: the Enigma of Sir Edmund Backhouse*, London, 1976; 再版から書名を *Hermit of Peking: the hidden life of Sir Edmund Backhouse* に変え、それに拠った日本語訳『北京の隠者』(田中昌太郎、筑摩書房、1983) が存在する。

² 典拠および参考としたのは主として、イタリアの『外交年報』一九三七年版 (*Annuario Diplomatico Anno 1937*。その五一四頁にロスの経歴を載せる)、ロスの長男でやはり外交官であったハーバート・スペンサー・ロスの自叙伝 (*Herbert Spencer Ros, It is so nice to remember, The Recollections of an Italian Diplomat*, New York, Vantage Press, 1978.)、さらにローマ大学教授であり、ロスと同じく外交官出身であったジュリアーノ・ベルトウッチョリ氏の「イタリア中国学史のために」と題する文章のロスを扱った部分 (*Giuliano Bertuccioli, Per una storia della sinologia italiana: prime note su alcuni sinologi e interpreti di cinese, Mondo Cinese*, n.74, giugno 1991, 30-33, 35, 39.) である。

³ ナポリでは東洋学だけでなく自然科学も専攻したという。Herbert Spencer Ros, *It is so nice to remember*, p.117.

⁴ 『外交年報』によれば、一九〇五年四月から土木局の三等官員として勤務したことになるから、大学卒業後すぐに外務省に勤務したわけではない。おそらく土木局勤務のかたわら試験の準備をしていたものであろう。

⁵ M.-C. Bergère, *The Role of the Bourgeoisie*, in Mary C. Wright (ed.), *China in Revolution: The First Phase, 1900-1913*, New Have, 1968, p.287

五年七月、二等通訳官に昇任⁶。一九二六年、中国治外法権研究国際委員会イタリア代表補佐を勤め、同年通訳兼任の領事となった。一九三一年、上海における日中停戦監視軍民委員会イタリア委員。一九三六年十月、一等通訳官に進み、同年十二月五日、領事として広州に転じた。一九四二年には総領事の銜を帯びた。一九四六年十月十六日付けで外務省を退職⁷。一九四七年、海南島における最高学府たるべく海口市に創立された私立海南大学の教授に就任、昆虫学及びラテン語を担当するとともに図書館長を兼ねたが、翌一九四八年六月十八日、大学附設の海南医院で逝去、享年六四歳であった⁸。

ロス文庫についてある程度まとまった情報を伝える、ほとんど唯一の文献は、昭和十九年（一九四四）当時台北帝大教授であった神田喜一郎が、台湾総督府の命によりロス文庫を親しく調査した時の簡単な報告「ロス文庫について」である。それによれば、ロス文庫は図書と標本とからなっていた。図書は大部分が漢籍であり、その数約七、八万冊、その他に小冊子類を加えれば十数万に上るといふから、非常に大きなコレクションである。またロスが大学時代に自然科学を専攻し、その最晩年には海南大学で昆虫学を講じたことはすでに触れたが、その方面の研究資料であろう、動植物や考古・民族学の標本も四、五千点あった。ロスの蒐集した中国古典籍は、伝統的な四部分類でいえば史部に偏り、なかでも広東・広西・雲南の西南三省に関するものが多く、地方志についていえば広東省のものはほぼ完備していたという。苗族やロロ族など少数民族の図譜類も幾十部あったといい、また第二種本『華夷訳語』の美しい白紙写本十二冊も存在した。詳しくは神田氏の一文に就き、見ていただきたい。

ロス文庫のなかで一際目立った存在は、海南島に関する文献である。それらは極めて網羅的に集められ、一纏めに別置してあったという。ロスは一九三六年に海南島の調査を行ったというが⁹、それ以前から南方民族には非常な関心を寄せ、一九三〇年には中央研究院社会科学研究所の特約研究員となって、民族学組に属している¹⁰。おそらくその頃から、海南島研究をライフワークに定めていたものであろう。一九三九年、当時イタリアの外務大臣であったチアーノ伯（Conte Galeazzo Ciano）に宛てて書いた公式書簡において、ロスは次のように述べている¹¹。

大臣閣下：

海南島の研究資料蒐集は前年の様々な出来事のために中断していますが、すでに非常に規模に達しており、一個の研究者の力を以てしては、それらを整理し且つ場合によ

⁶ 『外交年報』によれば、ロスは一九一〇年三月十日、三等通訳官（Interprete di 3^a classe）となり、一九一七年十二月十三日、二等通訳官（Interprete di 2^a classe）に昇進している。しかしその後、一九二三年十一月三十日に、第八級の三等通訳に指定されている（collocato nel grado 8^o (Interprete di 3^a classe)）のは、表面上二等から三等へ降格したように見える。これは恐らくこの間に制度が変わったもので、今回の二等通訳官への昇任は新制度のそれであったと見るべきであろう。

⁷ イタリア外務省の退職者名簿（Personale che ha cessato di far parte dell'amministrazione）に拠れば、ロスの最終官職は東方問題一等専門委員（commissario tecnico per l'oriente di 1^a classe）であった。いつまで総領事を勤めたかは確かではない。一九四三年ファシスト政権が崩壊したのちも、暫くは総領事であったはずで、下に触れる一九四四年二月の神田喜一郎による訪書記には「伊太利総領事ロス氏」と書いてあるから、まだその地位に留まっていたものと想像される。ただしベルトウッチョリ氏はロスの定年退職を一九四七年三月二十日とする（Bertuccioli, Per una storia, p.35, note 45.）。何か基づくところがあるはずであるが、今それを確かめ得ない。

⁸ 卒年について、蘇雲峯『私立海南大学 1947～1950』（台北、中央研究院近代史研究所專刊六一、一九九〇）では一九四九年とするが、ベルトウッチョリ氏及び子息の自伝による一九四八年六月が正しいと認められる。また蘇氏書の巻頭に掲げる梁大鵬「海南大学前後」によれば、ロスとともに海南島に来た中国籍の夫人と子息は、ロスの死後も大学に留まり、海南島が陥落する数週間前に香港に逃れたという。梁大鵬は副校長のち代理校長として海南大学と運命を共にした人物であり、その説くところに間違いはないであろう。因みにロス夫人は図書館員として勤務していたのである（同書 p.8）。

⁹ Herbert Spencer Ros, Op.cit., p.117.

¹⁰ 杜正勝「番社采風図題解」（中央研究院歴史語言研究所刊『番社采風図』1998）に引用する「国立中央研究院社会科学研究所十九年度報告」に基づく。社会科学研究所は一九三三年三月に歴史語言研究所に編入された。

¹¹ 一九三九年二月十五日カントン発。イタリア領事館のレターヘッドをもつ便箋二枚に書かれ、現在イタリア外務省外交史文書館（Archivio Storico Diplomatico）に所蔵される。その A.P.Cina Busta no.18 (1939), Posizione Cina I/7. 因みにチアーノ伯（1903-1944）はムッソリーニの女婿で、一九二八年から一九三三年まで外交官として中国にあり、中国駐在イタリア大使を最後に中国を離れた。

ては望ましい出版物のかたちにするなどのことは、ほとんど不可能な状態であります。研究に関わっている台北大学の教授諸兄が、私の資料を調査し、励ましの言葉とともに、研究完遂のため、様々な分野の専門家を協力させてよいと申し出られました。彼らの判断では、絶対に一研究者の書架に眠らせておくべきではないということです。……私は閣下に彼らの提案を受け入れる許可を電報にて頂戴いたしたいと思います。提案のようにすれば、大筋において私が著作を最終的完成に導くことができましようし、私には充分かつ専門的な学術的準備を有しないために、もしそれらに独力で対処したのでは、達成することが出来ない課題についても、均質な完璧性を保証し得るものと思われまます。

チアーノ伯の返事は、四月二五日、ロスの要求通り電報によって送り届けられた¹²。「貴殿は海南島に関する研究のため台北大学教授たちの協力要請を受け入れてよい。」

これを承けて、日伊海南島研究会本部（Centro Italo-Giapponese di Studi sull'Isola di Hainan）というものが、カントン市（広州）に設立された。当時台北帝大の人類学教室で出していた雑誌『南方民族』第六巻第一・二号の彙報欄にそのことが載っている。雑誌のこの号は昭和十五年四月二十八日の発行になっているが、研究会の発足はおそらく前年一九三九年のことであったと思われる。ロスが許可を急いだのには、日本側からも要求があったのであろう。台北帝大教授の白鳥勝義とロスの二人による発起・斡旋で、台北帝大総長と伊太利王室学士院長ジュゼッペ・トゥッチ（Giuseppe Tucci）が名誉顧問に推薦されたと記されており、さらに重要なことは「本会所有の図書館建設に至る迄 G.Ros 氏蒐集の図書を借用の形式に於て会員其他の自由使用に任す。該図書は G.Ros 氏私有の職員により保管され会本部に対する無料奉仕とする」と書かれてあることである。ロスは海南島研究における台北帝大との提携と引き換えに、自らの文庫を自由使用を提供したことになる。これがやがてのちに台湾総督府による購入話へと発展していくことになる。

神田喜一郎は、後年上記の「ロス文庫について」を自著『東洋学文献叢説』に収録するに際し¹³、以下のような後記を付け加えている。

昭和十九年六月発行の「台北帝国大学新聞」に載せたものである。「典籍割記」にも收めた。このロス文庫は、当時我国の台湾総督府が新設した南方研究所¹⁴で一括購入する運びになっていたのであるが、太平洋戦争の進むと共に、それは実現を見るに至らず、遂にそのままになってしまった。側聞するところによると、文庫はその後ロス氏によって伊太利に持帰られ、現に伊太利の某処にあるとのことである。但し真偽を知らない。

この後記にはいささか不可解な部分がある。というのは神田がロス文庫を検分したのは一九四四年二月のことで、それは台湾総督府による購入計画のためであった。しかしこの時点でイタリアのファシスト政権はすでに崩壊しており、ドイツに救出されたムッソリーニが北イタリアでサロ共和国を名乗っていた。在中国のイタリア外交官は北イタリア政権に忠誠を誓えばよいが、さもなくば日本軍により強制収容所に送られるという状況だったのである。このような状況下で平時におけるような購入ということが実際に行われ得たかということはかなり疑わしいものがある。事実、日本は占領下の中国で組織的な図書の略奪を行っていたのであるから、敵国人となったロスの文庫を「購入」ということは、いかにも迂遠な方法と言わねばならない¹⁵。ロス文庫は日本軍によ

¹²外交史文書館に所蔵される上記ロス書簡に添付。

¹³東京、二玄社、一九六九年。

¹⁴正しくは台北帝国大学附属の南方人文研究所である。この研究所は昭和十八年三月十五日付勅令により設置され、その目的は「南方諸地域に於ける政治、経済及び文化に関する研究」であった。『南方民族』第七巻一・二号の彙報欄を見よ。また昭和十九年一月一日現在の『台湾総督府及所属官署職員録』（台湾総督府編）によれば、神田喜一郎自身も（文化及民族調査を担当する）第二部の研究員に名を列ねている。

¹⁵戦時下中国における図書の略奪については、松本剛『略奪した文化』（東京、岩波書店、一九九三年）に詳しい。

て接收される予定で、その下準備のために神田が台北から出張した、というのが事実であったかもしれない。ベルトウッチョリ教授によれば、「彼の蔵書は一九四三年に日本人が略奪し、日本への移送を準備した。ところがアメリカの潜水艦がそれを積んだ船もろとも海底に沈めてしまった」と書いている¹⁶。ベルトウッチョリ教授はその根拠を示していないが、同氏は同じイタリアの外交官として中国に居たのであるから、状況からの推測としては聞くべき点が多いように思われる。ただ一九四三年というのはおそらく誤りであり、もし略奪が事実としても一九四四年のことでなければならぬ。では「太平洋戦争の進むと共に、それ（購入計画—筆者）は実現を見るに至らず、遂にそのままになってしまった」と、神田が後記にいうのは一体どういうことであろうか。神田は略奪を知らされていなかったか、あるいは知っていて意図的に伏せたかのどちらかしかない。「側聞するところによると」として、ロスがイタリアに持ち帰ったということを行っていることからすれば、神田はロスとロス文庫のその後について多くを知ってはいなかったようである。もしすべてを知っていたとしたら、ここまで白々しいことは書けなかったであろう。さらにロスと台北帝大とのこれまでの協力的な関係が配慮されて、ロス及びロス文庫に対しては特別な優遇があったということも考えられなくもないが、すべて推測の域を出ない¹⁷。

日本軍が略奪し、アメリカの潜水艦によって海の藻屑と消えたロス文庫は、しかしその全部だったのではないらしい。戦後、海南大学の設立に当たって、海口に赴任したロスが自ら図書館長を兼ねたことは、すでに述べた。その時、彼は蔵書三十数箱を大学に寄贈しているのである。それは海南島に関する文献と標本を主として、民国一六・七年頃に共産党が海南島に設立したソビエトの関係文書や旗なども含まれていたという¹⁸。この時期に新たに購入したとは考えられないから、これは略奪された残余の部分であったと推測できる。海南島関係の文献であることからすれば、日本軍による接收時、特にロスの要請が受け入れられたものかも知れない。いずれにせよ、その文献も今では所在を確かめるすべがない¹⁹。

ベルトウッチョリ氏は、また別の情報を伝えている。それは、海底に沈んだ蔵書は、実はロスがその一生のうちに蒐集した第二のもので、第一のものは、彼が領事を勤めていた漢口にあった。極東の政治情勢の悪化を心配したロスは、その蔵書をイタリア政府に寄贈してしまおうと考えた。しかしムッソリーニの内閣からの返事は「司政官がかく重要な贈り物をその属官から受けることは適切ではないと思料される」というもので、結果、このロスの蔵書はのちに北京図書館の得るところとなったという。ベルトウッチョリ氏の使った資料はイタリア外務省外交史文書館にある「ロス文

¹⁶Bertuccioli, op.cit., p.32.

¹⁷ロス文庫が無事であった可能性も、実はわずかではあるが存在する。それは次のようなまことしやかな話が伝えられているからである。六〇年代初期に台北の南郊新店にあった一倉庫から民国期の広東省土地調査冊が大量に発見された。この倉庫は戦前に総督府の南方資料室が使用していたものであり、戦後、中央図書館の台湾分館の管理下に置かれていた。この資料は一九六六年に台湾分館の新しい建物が完成した後、そこに移され、現在に至っている。その調査冊の目録を作成したホーフハイントは、前書きのなかで、伝聞としてはあるが、調査冊が台湾に移送された経緯に触れている。それは第二次大戦の勃発時に遡る。ロスというイタリアのカントン領事が中国書の大きなコレクションをもっていた。彼はそれを戦争が始まる前に日本の台湾総督府に売ろうとした。一部分は日本に運ばれたが、イギリスが日本に宣戦した時、香港政府がまさに船積みされようとしていた書物を押収した。のち日本軍が香港・カントンを攻略したとき、どうして日本がその日本移送に失敗したのかは明かではない。しかし戦後、台湾の新しい国民党政府はこの購入の事実を探り当て、当時の植民地政府が購入したものであるからには、ロス文庫は台湾に属すると主張したのである。台湾行政公署はそのコレクションが台湾の図書館がすでに所有するタイプのものであると考え、その正当な所有物を確保すべく、彼らの手元にある目録を持たせてある人物を香港に派遣した。かくしてカントンと香港の古書取引業者は良い稼ぎをすることになった。当該の人物はそれっきり姿を消し、ロス文庫がどうなったかも定かではなかった。そうこうするうち、一九四六、七年のある朝、図書館では基隆港の税関から、図書館宛てにカントンからトラック一台分の荷物が着いたという通知を受け取った。図書館員はそこにロス文庫が入っていると思ったが、実際には件の土地調査冊だったというのである。好くできた話である。もし事実とすれば、ロス文庫は分散販売されたとしても、世上に存在していることになるが、時系列を考えてもあまりありそうもない話である。A *Catalogue of Kuang-tung Land Records in the Taiwan Branch of the National Central Library*, compiled by the staff of the Taiwan Branch of the National Central Library, with an Introduction by Roy Hofheinz, Jr., 1975, San Francisco, Chinese Materials Center, Inc., p.viii.

¹⁸蘇氏前掲書、頁二〇。

¹⁹今日海口市に存在する「海南大学」は八〇年代に出来た新しい大学で、四〇年代後半に存在した「私立海南大学」とは何らの関係が無く、ロスの蔵書がここに受け継がれていることは期待薄である。

書」中のもので²⁰、ムッソリーニからの返信が一九二四年三月三〇日付けの北京駐在イタリア大使チェルテーティ（Vittorio Cerruti）宛て、北京図書館購得の件に関するものは一九二八年十二月二十七日発の電報で、北京の公館では翌日に受領したことになる。これをロスの履歴に当てはめると、ロスが漢口から北京に転任したのがわずか一日違いの一九二四年年三月三一日であるから、北京転任を期に蔵書の処分を考えていたことになる。しかし故国への遺贈は不調におわり、蔵書は北京にもたらされた。しかし北京図書館に帰したとされるロス文庫第一蒐集であるが、筆者は寡聞にしてその事実を耳にしたことなく、また北京図書館の館史に関する文献類にも見られない。一九二八年の電報に書かれた内容がどういうものであるか知りたいところであるが、おそらくそれは北京図書館との間の蔵書売却交渉に関わるものではあっても、最終決定を意味するような内容のものではないと思われる。実はその第一蒐集なるものは、この方面の研究者なら誰しも知るように、満鉄大連図書館の購入するところとなったのである。その経緯は館長柿沼介による回想に詳しく述べられている²¹。柿沼は昭和四年（一九二九）一月、顧問格の松崎鶴雄とともに北京に出張、対支文化事業総委員会幹事の瀨川浅之進の紹介によってロス宅を訪問、まず六〇〇点ほどの地図類を一括三千余円で購入、さらに中国の回教にかんする図書絵画など約三六〇余点、その他いろいろな貴重資料を購入した²²。北京図書館との交渉に関する電報が一九二八年の年末、柿沼の北京行が翌年の一月であるから、この時期、ロス文庫売り出しの報に接して、多くの図書館がロスと接触を開始していたのであろう。事実、柿沼は上記回想で「丁度その直後、矢張り購書の目的で燕京大学の教授達がロス氏の書庫を訪問したので、或は地図類も一日違ひで彼らの手に帰したかも知れぬと、その入手の幸運を語り合ったことであった」とも言っており²³、なにも北京図書館に限らなかったことが知られる。この時購入された地図と回教文献は早速大連図書館で整理され、目録が作成された²⁴。戦後同図書館は一時期ソ連に接收された後、新中国政府に引き渡され、大連市図書館となり今日に至っている。ロスの文庫もそのまま保存され、地図については近年目録が出版された²⁵。

北京で多くの蔵書を大連図書館に売却した以外にも、ロスは折に触れてその蔵書の一部を他に譲ったらしい²⁶。それらを逐一追跡し得ないのはいかにも残念であるが、かろうじて以下のものが知られる。例えば現在台湾の中央研究院歴史語言研究所に所蔵される『番社采風図』『黔苗図説補』『龍勝五種図』『黔苗図説』といった少数民族図譜類は、登録カードによれば民国二十四年（一九三五）二月にロスから、歴史語言研究所の民族学組の手に渡っている²⁷。彼が同研究所の特約研究員であった縁によるものであろう。また一九三六年の海南島調査の後には、現地で蒐集した数多くの動植物標本と現地住民の手になる工芸品を上海の震旦博物院に寄贈した²⁸。

²⁰Bertuccioli, op.cit., p.35, note 46, 47. この「ロス文書」(Pacco Ros)は個人文書のために非公開になっている。元外交官のベルトウッチョリ氏にはその閲覧に特別な便宜があったものと思われるが、当面これを検証し得ないのは残念である。

²¹「購書の思ひ出二、三」『書香』第一〇〇号、昭和二年十一月、pp.2-3。

²²昭和二年夏から大連図書館に勤務し、戦後も昭和三〇年まで同図書館に留用された大谷武男は、図書館に入って間もない頃のこととして、「その頃連図は、北京の有名な集書家イタリア人ロスの全蔵書と、宋元版を含む大量の漢籍を購入して活気に溢れていた」と書いているが（「大連図書館の終焉とその後」『彷彿月刊』第四卷第六号（一九八八年五月）「特集：満鉄図書館」、頁九）、おそらく柿沼の言うのが真実で、全蔵書ということではなかったと思われる。

²³柿沼、上掲文、p.2。

²⁴『支那地図目録』南満州鉄道株式会社大連図書館刊、昭和五年。『支那回教文献目録』満鉄大連図書館編、昭和十四年。

²⁵『中国古地図精選』北京、中国世界語出版社、一九九五。ただしその「前言」に、一九二五年にロスから購入したとあるのは、誤りである。

²⁶神田上掲文でもそのことに触れ、「もっともロス氏は、これまでその蒐集の一部を幾度か他に割愛したこともあって、現に大連図書館に蔵する貴重な禹域地図数百種の如き、前年ロス氏が同館に売渡したものである」と書いている。

²⁷前掲の杜正勝「番社采風図題解」による。四種のうち前三点が寄贈、最後の一点は購入したという。

²⁸Herbert Spencer Ros, Op. Cit., p.117. 震旦博物院はフランス人イエズス会士ピエール・ウッド（韓伯祿、Pierre Heude: 1836-1902）が徐家匯に創立した博物院で、今日の上海自然博物館の前身。戦前には一階を歴史考古学関係、二階を生物関係の展示にあて、有料で公開していた。幼方直吉「上海文化の遺産—主として外国系の図書館について—」『書香』第十五巻第四号（昭和十八年）頁三七。

ロスには自分の蔵書に蔵書印を捺すことをしなかった。また神田氏の簡単な記録以外には完備した目録も存在しない。したがってロス文庫旧蔵品がたとえ市場に出現したとしても、また書賈の手を経てすでに公私の文庫に帰っていたとしても、それと言い当てることは非常に困難であろう。大連に残る地図や一部の図書だけでは、その全貌を窺うことはもとより不可能である。形あるものは必ず亡びるとはいえ、蔵書の運命というものにはかない。ロス文庫も数多くの他の文庫と同じく、名のみを史上に留める結果になったのであろうか。

(たかた ときお・京都大学人文科学研究所)